

# On the Nomgon Ruins and Inscription Preliminary Research Report : Historical Significance, Issues, and Prospects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OSAWA, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00069164">https://doi.org/10.24517/00069164</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



テギンの父、エルテリッシュ可汗(クトルグ可汗)の名で建造されたものと評価されている。考古学的発掘作業の間には、この遺跡の複合施設の状況から、一人の可汗に関するものとして我々が考えてきたひとつの石像の頭部、胴体の断片、2匹の雄羊、子供と一緒に作られた一匹の獅子の石像、屋根瓦、煉瓦、穴の開いた供養石と”Eşir”(Aşina)の可汗の家系のタムガのような、各種の遺物が発見された。この発見は世界のテュルク学にとって、特別の意義あるものと見なされる真の問題点は何かということ、発掘した領域内で発見された碑文断片である。碑文断片は当該地方で継続調査の際に発見された最初の碑文であるという観点からその重要性を提起している。碑文上部では二匹のオオカミ(龍とすべき一訳者補)とひとつの蓮の形状をした花が描かれている。碑文では、テュルク語、ソグド語とブラーフミー文字からなる三種の異なった言語に関わるテキスト断片が存在することが証されている。碑文の下部と理解される亀趺も発見された遺物に含まれている。

キーワード：

クトルグ可汗、エルテリッシュ可汗、古代テュルク文字、ソグド文字、ブラーフミー文字、碑石、碑文、遺跡の複合施設、獅子と雄羊の石像、犠牲石、亀趺、瓦、煉瓦

formed in honor of the founder of the Second Eastern Gokturk Khaganate, who ruled in 682-692, Ilterish Khagan (Qutluq Khagan), the father of Bilge Khagan and Kultigin.

During the excavation works, various finds such as the head and lower part of a statue in the form of a Khagan, two rams, a statue of a lion made together with their cubs, roof tiles, bricks, sunag stone with a hole in the middle and the stigma of the “Ashir” (Ashina) Khagan generation were revealed from the monument complex. The main feature of this discovery, which makes it important for Turkology world, is a piece of written monument found from the excavation site. This is significant in that it is the first inscription found in studies carried out in the region. Two wolves and lotus-shaped flowers are depicted at the top of the inscription. Texts in the inscription were written in three different languages - old Turkish, Sogdian and Brahmi. The turtle statue, which is understood to be the pedestal of the monument, is also among the finds.

Keywords:

Qutlug Khagan, Ilterish Khagan, ancient Turkic inscription, sogd inscription, brahmi inscription, written monument, inscription, monumental complex, ritual complex, statues of lions and Aries, sunag stone, turtle pedestal, tiles, bricks.

<翻訳後記>

ノムゴン遺跡碑文の予備的調査報告を読んで  
—ノムゴン遺跡碑文調査報の学史的意義、問題点および今後の展望—

大澤 孝

2022年9月25日にトルコ共和国のブルサ市において、ブルサ市およびカザフスタンの国際テュルク・アカデミー研究所共催による国際ワークショップ「オルホンからオルハンギーへ(第4回国際考古学・文化学的散策)」が開催された。本稿はカザフの国際テュルク・アカデミーとモンゴル国のモンゴル科学アカデミー考古学研究所の研究者によ

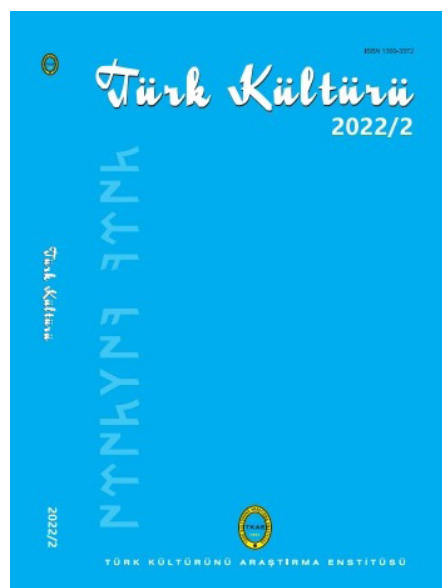


図1 『トルコ文化』2022-2(LX)

る2022年7月28日から8月29日に行われたノムゴン遺跡の発掘調査に関する発表要旨の日本語訳である。原載はトルコ共和国のトルコ文化研究所が発行している“*Türk Kültürü*” (『トルコ文化』)においてトルコ語で公刊された(図1)。

原載(以下、トルコ語版):

Kutlug kağan anıt Külliyesi ve yazılı bitig taşı (Uluslararası Türk akademisi, Moğolistan Bilimler akademisinin arkeoloji Enstitüsü "Nomgon-2019, 2022" ortak heyetinin bilimsel Ön raporu), *Türk Kültürü 2022-2*, Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü: 1-22. [「同題」『トルコ文化』2022-2(LX), トルコ文化研究所: 1-22]

なお、本論文からアゼリ語に翻訳されたものが“Yazılı Abidələr, Qutluq Xaqan Abidə Kompleksi və Yazılı Kitabəsi”の表題でアゼルバイジャン共和国のトルコ学雑誌においても掲載された<sup>(1)</sup>。また、同じ調査報告はモンゴル科学アカデミー考古学研究所の研究者によって、“*Археологийн судлал*”(『考古学研究』)41号に掲載されている<sup>(2)</sup>。なおモンゴル側では、最初の2019年の発掘概要については“*Монголын археологи-2019*”(『モンゴル考古学2019』)に掲載され<sup>(3)</sup>、また2022年のノムゴン第2遺跡に特化した発掘概要については“*Монголын археологи-2022*”(『モンゴル考古学2022』)に掲載されており<sup>(4)</sup>、翻

(1) Darxan XIDIRƏLİ, Altangerelin ENXTOR, Napil BAZILXAN, Nurbolat BOGENBAYEV, Tserenxandin BUYANHIŞIQ, 2022, Qutluq xaqan abidə kompleksinə yazılı kitabəsi (Beynəlxalq Türk Akademiyası və Monqolustan Elmlər Akademiyasının Arxeologiya İnstitutunun “Nomqon – 2019, 2022” ortaq nümayəndə heyətinin ilkin elmi hesabatı), *Türkölogiya 2022-2*: 11-32.

(2) Энхтөр А., Дархан К., Напил Б., Нурболат Б., Буянхишиг Ц., Батболд Г., Далантай С., 2022, Кутлуг хааны тахилын онгон цогцолбор, гэрэлт хөшөө, *Археологийн судлал, т.41*: УБ: 69-86. [「クトルク可汗の祭祀複合遺跡、石碑」『考古学研究』41]

(3) Энхтөр А., Напил Б., Далантай С., Буянхишиг Ц., Бөгөнбаев Н., 2019, Их Номгоны хөндийн дурсгалуудын тухай, *Монголын археологи-2019*, УБ: 88-98. [「イフ・ノムゴン<sup>ホント</sup>溪谷の遺跡について」『モンゴル考古学2019』]

(4) Энхтөр А., Буянхишиг Ц., Батболд Г., Дархан К., Напил

訳者はこれらも随時、参照している<sup>(5)</sup>。

トルコ語版とモンゴル語版の両者の記載内容に関しては、トルコ語版が、カザフスタンの古代テュルク文献学者のN.バズィルハンが執筆していることもあり、考古学的調査の経緯が簡略に記載されているのに対して、モンゴル版の方が遺跡の位置関係、発掘の手順や遺跡のマウンドを掘り下げた際の地層状況や出土遺物片の記載が充実しているものの、発掘した際の図面が付されておらず、位置関係の理解に困難を来したこと、また、遺跡からの出土物に関しては本文の他所でも言及されていて、重複個所が多々みられたため、本稿では原型を損なわない範囲で、モンゴル語版からの補充は極力、最小限にとどめた。

また、翻訳する際に苦慮した点は、トルコ語版の論文で使用されている突厥人の名前や遺跡名の表記は、本報告の執筆者が依拠する学説を反映するものとなっており、翻訳者自身の見解とは必ずしも一致していない個所がしばしば認められる点である。例えば、漢文での關特勤の「關」の音をkülとするのか、kölとするのか、という問題ですら、未解決である。突厥文字を最初に解読したW.トムセンやV.V.ラドロフらはkülüg「名誉の」という単語との関係を想定し、\*küllügという所有を形成する接辞-lügの前のkülに関係する語とみたようであるが、kül「灰」という意味しかない。G.クローソンもその音韻は不透明と記した上で、なおもkülと表記すべきとした[Clauson G., *ibid*(*訳文訳註 14*): 715 a-b]。1980年代まで踏襲されてきた。その後、フランスのテュルク学者L. BazinがMahmūd Al-Kāšgarīの

Б., Нурболат Б., 2022, Монгол Улс-Олон Улсын Түрэг Академийн хамтарсан “НОМГОН” төслийн 2022 оны хээрийн шинжилгээний ажлын товч үр дүн, *Монголын археологи-2022*, УБ: 157-162. [「モンゴル国・国際テュルク・アカデミー共同“ノムゴン”プロジェクトの2022年フィールド調査簡報」『モンゴル考古学2022』]

(5) なお、本訳入稿後にカザフ語でもノムゴン遺跡の報告が刊行された。書誌情報は下記のとおりである。

Қыдырәлі Д., Энхтөр А., Базылхан Н., Бөгенбаев Н., Буянхишиг Ц., Батболд Г., 2023, Номгон-2 көне түрік ғұрыптық кешені зерттеулерінің кейбір нәтижелері, *Археология Казахстана 2023-1*, Алматы: Институт археологии имени А.Х. Маргулана: 68-83.

Divân Lügât At-Türk 『テュルク・アラビア語百科事典』の bilge の項目の中で「とても賢明なこと、多さ、という観点から「湖のように知恵の満ちた」という意味で köl bilge khan と名付けられる」「また賢明な人を bögü bilge といわれる」という記載に依拠して、Köl irkin を「湖のごとき知恵深きイルキン」という言辞に従い、オルホン碑文の主人公の名前も küI ではなく、köl という読みを提唱して以来、トルコ共和国でも 1990 年以降はこの読みが一定の支持を得てきた<sup>6</sup>。これを支持した護雅夫以来、我が国では köl Tegin という表記が通説となっているが、その一方で、旧ソ連圏の中央アジアのテュルク系諸国では依然として W. W. ラドロフ以来の KüI Tegin の表記を踏襲している研究者が多い。トルコ共和国でも Köl の読みを支持するものもいる一方で、küI の読みを踏襲する T. Tekin を始めとして、A. テミルは KüI 「灰」を名前に使用されたのは、古来、テュルク族が伝統的に火を崇拝する信仰があり、それに由来するとの理由から küI の読みを支持した<sup>7</sup>。最近、M. Ölmez は恩師の T. Tekin やドイツの G. Doerter の見解に従いつつ、最近の論考では漢語の關特勤の「關 que」の中古音 \*k<sup>h</sup>uat に依拠すべき事、またこの語が古代テュルク語やウイグル語で標記された例がないことから、漢語の古代音韻を残す韓国語では gwel/kwel が対応する事から、küIこそが正しい形であると主張する<sup>8</sup>。この主張を皮切りに、古代テュ

(6 Bazin L., 1981, *Kül Tegin ou Köl Tegin?*, *Scholia*: 1-7. [『Kül Tegin それとも Köl Tegin?』]しかし、G. クローソンはこのカーシュガリーの köl の説明は「全く不合理なもの」として否定している [Clauson G., *ibid*: 715 a].  
(7 Temir A., 1981, *Türkçe Kül-Tigin ve Moğolca Otçigin Adları üzerine*, *Scholia*: 194-200. [『トルコ語のキュル・テギンとモンゴル語のオッチギンの名前について』]  
(8 Ölmez M., 2011, *Eski Uygur ve Çin kaynakları ışığında Orkhon yazıtlarında geçen yer ve kişi adları, Orhon Yazıtlarının bulunuşundan 120 yıl sonra Türklük Bilim ve 21. Yüzyıl' konulu III. (Uluslararası Türkiyat Araştırmaları Sempozyumu 26-29 Mayıs 2010 bildiriler kitabı)*, Hacettepe Üniversitesi, Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü, Ankara: 629-640. [「古代ウイグル語と漢語資料から明らかにされるオルホン諸碑文中の地名と人名』『オルホン碑文発見から 120 年後のトルコ学と 21 世紀をテーマとする第 3 回国際トルコ学研究シンポジウム (2010 年 5 月 26-29 日) 発表要旨集』ハジェテベ大学トルコ学研究]

ルク文献学者の Hatice-Şirin など若手・中堅の研究者の間でも küI Tegin の読みに変更する者も出てきている。なお、本報告書の執筆者であるカザフ人文文献学者の N. バズィルハンやモンゴル版の報告を作成した考古学者たちも、ラドロフ以来の読みを踏襲する文献学者 L. ボルドの読みに従い、Kül Tegin の読みを踏襲している。これなどは序の口であり、報告者たちが引用するオルホン碑文などの読みには今日のテュルク文献学的立場からは、到底受け入れがたい転写や文章の解釈が散在している。ただ、今回の翻訳に際しては、極力、訳者の見解とは別に、原著者たちの表記に従ったうえで、最小限、訳者の意見を補注として補ったことを明記しておく。

図版に関しては、トルコ語版よりも、同じ写真が掲載されたアゼルバイジャン語版の方が鮮明であることから、こちらを転載させていただいた。なお図版のキャプション番号は原著にはなく、訳者が独自に補ったことをお断りしておく。

#### ■ノムゴン遺跡発見の意義と位置づけ

今回、取り上げたノムゴン遺跡・碑文の発見は既に 2008 年段階で、その遺跡が発見報告されたものの、2019 年まで発掘調査は実施されていなかった。

モンゴル国での突厥碑文の発見に至る経緯に関しては、18 世紀初頭に南シベリアを訪れたスウェーデン人の Ph. J. ストラレンベルグがイエニセイ河中上流域で先史時代から中世に至る考古学の遺跡調査におもむいて以降、北欧バイキングたちが使用したルーン文字に似た文字銘文 (今日で言う、イエニセイ碑文) がしばしば報告されていた。その後、19 世紀末にヘルシンキの研究者が南シベリアでの考古学調査をまとめて 1889 年に出版した、その同年には、イルクーツク在住のロシア人考古学者の N. M. ヤドリントツェフが現在のモンゴル国オブルハン<sup>アイマク</sup>ガイ県のオルホン溪谷東側のホショー・ツァイダム盆地でキュル・テギン遺跡・碑文 (732 年建碑) とビルゲ可汗の遺跡・碑文 (734 年建碑) を発見して、1890 年にその報告を出版したことを契機に調査研究が開始された。その発見を受けてフィンランドの A. O. ハイケルを始めとする調査隊が、オルホン碑文遺跡と近郊のアルハンガイ県<sup>アイマク</sup>ホント<sup>ソム</sup>郡に位置する東ウイグル可汗国の第 9 代保義可汗のカラバルガスン碑文の調査を併せて行い、1892 年にヘルシ



ンキで報告書を出版した。同年にはロシアのV. V. ラドロフを始めとする調査隊による大部の調査報告書『モンゴル古代遺跡図譜』4冊が1892～1899年にサンクトペテルブルグで出版された。またオブルハンガイ<sup>アイマク</sup>県オヤンガ<sup>ソム</sup>郡のオンギ遺跡・碑文も先のN. M. ヤドリツェフにより発見・調査され、写真やスケッチ類がペテルブルグのラドロフに送られ、上記の『モンゴル古代遺跡図譜』に収録された。また、オランバートル西南のナライハのバイン・ツオクト盆地からは1897年にYe. N. クレメンツ夫人によるトニクク遺跡・碑文の発見、そして1912年のV. L. コトヴィチによるトゥブ<sup>アイマク</sup>県エルデネ・マンダル<sup>ソム</sup>郡のイフ・ホショート遺跡・碑文の発見・調査があり、世界の学界に報告された。また、1909年にフィンランドの言語学者G. ラムステッドや考古学者のS. パルシらがモンゴル国に入り、ウルガ方面では、突厥のトニクク碑文の調査、ハンガイ方面では、オンギ遺跡・碑文の表面調査に加え、そして東ウイグル可汗国時代の第2代可汗のモユン・チョルのシネオス遺跡・碑文(建碑579年頃)を発見・調査するなど大きな成果を挙げた。

その後、1918年以降はロシア革命とその余波がモンゴルを巻き込む。社会主義思想のもと、モンゴル人民共和国の時代の初期には、国営農場の創設による草原の農耕化政策や、仏教化政策によるラマ僧らによって草原の伝統文化を伝える古代遺跡が破壊されるなどした。第二次世界大戦勃発以前にはソ連の1923～1926年のP. K. コズロフ、1925年の

B. Ya. ウラジミルツォフ、1927年のG. E. ボロフからのトゥブ<sup>アイマク</sup>県のムハル遺跡の発掘調査もあったものの、実際に突厥・ウイグル期の遺跡・碑文の調査が活発化するの、戦後である。特に1960～1980年代に実施されたソ連・モンゴル共同調査隊の活動は目を見張るものがある。その時代には、ソ連のS. G. クリヤシュトールヌィ、V. E. ヴォイトフなどがモンゴル人考古学者のKh. ペルレー、N. セル-オドジャブ、M. シネフー、G. メネス、D. バヤル、S. ハルジャウバイ、A. オチルらとの共同調査で大きな成果を上げた。この間、1958年のチェコスロバキアの考古学者L. Jislとモンゴルの考古学者N. セル-オドジャブとの共同調査として、キュル・テギン遺跡が発掘された。マウンド西方の犠牲石、祭祀廟や周囲の土葬で使用されたおびただしい軒丸瓦や

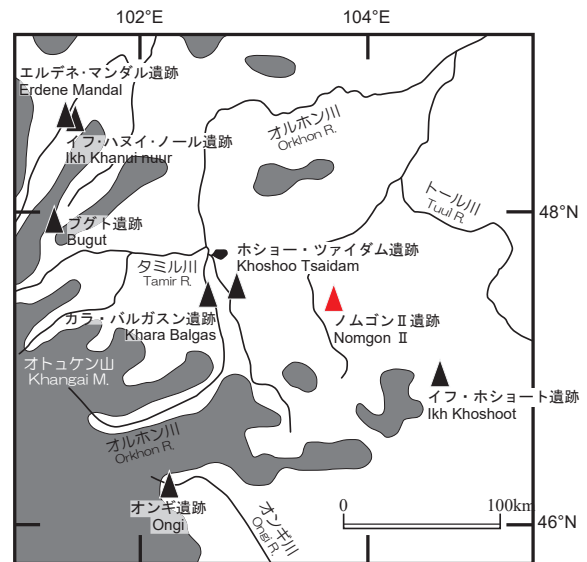


図2 ノムゴン遺跡の位置

軒平瓦片、煉瓦片や敷石片、石人や石獣、亀石片、東方へのバルバル列石、キュル・テギンの石像頭や胴体片、夫人断片像などが発見された。また、アルハンガイ県イフ・タミル郡のブグト遺跡・碑文の発掘調査、トゥブツェフ県のウンゲート碑文遺跡の発掘調査、ザブハン県のツェツェーフ側沿岸でのツェツェーフ(イデル)遺跡・碑文、東ウイグル可汗国期のタリマト碑文(建碑は754年頃)、フブスゴル県のテス河上流で発見されたテス碑文断片(建碑は750年頃)、南ゴビ県のセブレイ郡で発見されたセブレイ碑文断片、1980年の中ゴビ県のチョイル郡のチョイル碑文の再解読などをはじめ、各地からは岸壁銘文が数多く報告された。これらの遺跡・碑文の調査成果はV. E. ヴォイトフ『古代テュルクの宇宙観と世界観—西暦6～8世紀のモンゴリアでの信仰埋葬遺跡』<sup>9)</sup>に詳しい。

その後、1991年にソ連が崩壊し、民主化が進んだモンゴル国では、モンゴル科学アカデミー考古学研究所や歴史学研究所との学術協定に基づき、各国の研究機関との国際共同プロジェクトが始動する。日本からは1990～1995年の日本・モンゴル共同でチンギス칸の墓を探す“三河プロジェクト”がモンゴル東部で実施された。また、碑文調査としてビチェースプロジェクトが1996～1998年に日蒙合同調査隊により実施され、従来の碑文の読みを再検証の上、新たな読みを提示し、学界に大きなインパクトを与えた(この成果については先に言及した森安孝夫・A. オチル編『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア研究会、1999年の各遺跡・碑文の項目を参照されたい)。その後、2000年にはトルコ・モンゴル共同発掘調査ではビルゲ可汗遺跡から大量の宝物が出土し、大きなセンセーションを巻き起こした(ビルゲ可汗遺跡の発見をめぐる経緯と2001年のトルコ・モンゴル合同調査のあらましについては、大澤孝[2007]<sup>10)</sup>を参照)。

それ以降もロシア、ドイツ、韓国、日本、アメリカ

(9) Войтов В. Е., 1996, *Древнетюркский пантеон и модель мироздания, в культово-поминальных памятниках монголии VI-VIII вв.*, Москва: Изд-во Государственный музей востока.

(10) 大澤孝 2007 「近年におけるビルゲ可汗遺跡の発掘調査と亀石・碑文の方位から見た対唐関係—トルコ・モンゴル合同調査隊による発掘調査簡介」『史朋』39号, 北海道大学文学部東洋史談話会:14-38.

カ、フランス、イタリア、モナコ、イスラエル、中国などの国々との国際共同発掘調査が実施されてきている。突厥・ウイグル時代の碑文に関しては、モンゴル考古学研究所との共同研究では匈奴、契丹、モンゴル時代の土城遺跡の発掘調査やドイツとの共同調査でカラバルガスン城が発掘されるなど大きな進展を見せている<sup>11)</sup>。突厥碑文に関して言えば、訳者も2008年以降、モンゴル考古学研究所と共同で突厥・ウイグル時代の遺跡・碑文の表面調査および発掘調査を行ってきており、東部モンゴル地方でのテリス・シャドという東方の軍事・行政の最高指揮官に関わるドンゴインシレー碑文遺跡などの発見・発掘調査を行った<sup>12)</sup>。なお、モンゴル国でも1996年以降、モンゴル国立大学のモンゴル人テュルク学者のTs. バットルガが中心となり、モンゴル各地の突厥銘文調査や解読報告が行われてきた<sup>13)</sup>。

以上の遺跡・碑文の調査研究史の中でも、今回の調査が実施されたノムゴン遺跡は当時の突厥の首都が置かれたハンガイ山脈の東方を流れるオルホン河に近く、これまで知られたビルゲ可汗遺跡やキュル・テギン遺跡から60km東方にはなれた場所で見つかった突厥可汗と関わる遺跡・碑文であると共に、碑文には突厥文字、ソグド文字、ブラーフミー文字が刻まれている。管見では、2文字言語が刻まれているのは、ソグド文とブラーフミー文字銘文がぎざまれたブグト碑文、漢文と突厥文のキュル・テギン碑文、ビルゲ可汗碑文、3つの文字言語が刻まれたのはソグド文、突厥文、漢文を持つカラバルガスン碑文しかないことを想起するならば、本碑文が3文字言語をもつことからみて、極めてユニークであり、その研究は大きな意義を有するものである。

(11) 国際シンポジウム「モンゴル考古学の現在」(2014年12月20日、於大阪大学中之島センター、大阪大学大学院言語文化研究科主催)を開催しており、その報告集、大澤孝編2015『モンゴル考古学の現在・国際プロジェクトと歴史文化遺産・碑文の調査研究』を参照。

(12) 大澤孝 2021 「東部モンゴルでの蒙日共同考古学調査の歩みとイフ・ボラギーン・ウンドウル・ドブジョー遺跡発掘の目的と展望」『金大考古』80, 金沢大学人文学類考古学研究室:88-93.

(13) Баттулга Ц., 2022, *Монголын руни бичрийн дурсгалын шинэ судалгаа*, Боть I-III, УБ: МУИС.

■ノムゴン碑文に関する現段階での私見

内容に関して言えば、ノムゴン遺跡・碑文はモンゴル国オブル・ハンガイ県のホショー・ツアイダムに位置する突厥第二可汗国の第3代のビルゲ可汗(在位716～734年)とその弟のキュル・テギンの碑文・遺跡に、その周りに周溝と土手に取り囲まれた長方形のマウンド、西方に置かれ、中央に円形穴の施された方形犠牲石、その東方には瓦屋根をもつ墓廟建築、冠を被った石像頭部片と左手を膝に置いた貴人的なポーズ、そして東方への参道付近に置かれた碑文断片と亀趺、そしてマウンド東方に続くバルバル列石と複数の立石に刻まれた突厥王族の阿史那の氏・部族指標である雄山羊タムガの刻印、これらはいずれも本遺跡の被葬者が突厥第二可汗国時代のカガンやそれに匹敵する立場にあった王族の一人、であることを端的に示すものである。その点については、誰も異論はない。

その上で、本遺跡の中央から出土した碑文の碑頭片に残された三種の文字(突厥文字、ソグド文字、ブラーフミー文字)からなるテキストの存在は先のオルホン碑文が漢文と突厥文からなるのに対して極めて特徴的である。公刊された写真からは、確かに「qutluy qayan」の表記は在証されるので、報告者たちはこの名称を突厥第二可汗国の創始者の名前であるクトルグに可汗が付せられたとして、即位後にイルテリッシュ可汗(在位582～691年)を称した人物に当てている。遺跡内容や碑文で使用されたルーン文字種がプリミティブな傾向をもつこと、そしてソグド語テキストで彼らが判読したという「クトルグ」という字句の存在(なお、このソグド語の読みが正しいのかどうかについては今後、専門家の検証を待たなければならない)、はその蓋然性を高めている。訳者は、2022年の夏に彼らが発掘調査した直後の8月24日15:00にモンゴル国の首都オランバートルで記者発表した内容を、日本モンゴル学会の速報版で紹介した経緯がある<sup>14)</sup>。

そこでも訳者が指摘したように、この qutluy を普通名詞(人名)として解すのか、それとも「幸福な; カリスマ性のある」という形容語と解すべきか、という問題のほか、たとえ前者の場合でも、この人物

(14「モンゴルでの新発見の突厥碑文速報」日本モンゴル学会速報コラム, 2022年9月1日。(日本モンゴル学会コラム: [https://ja-ms.org/jams\\_column/](https://ja-ms.org/jams_column/))

が初代の骨咄祿、イルテリッシュ可汗なのか、それとも自らの可汗号の中に骨咄祿 qutluy の称号を含んだビルゲ可汗の息子である苾伽骨咄祿可汗(Bilge qutluy qayan、彼はその後、唐から冊立されて、登利可汗 Tengri qayan を称する)や740年代に即位した骨咄祿葉護可汗(qutluy yabyu qayan)など、正式の称号を簡略化した別の突厥可汗の可能性も考慮すべきであろう(各可汗が帯びた称号に関しては『新



ノムゴン第2遺跡の発掘風景



マウンドから出土した煉瓦片



軒丸瓦

図3 ノムゴン遺跡に関する調査成果報告時に公開された論文には掲載されていない写真(いずれも Bogenbaev 撮影・提供)



唐書』巻215突厥下を参照<sup>(15)</sup>。ただこれらの問いへは、この称号のあとに続くテキスト個所が現時点では、判読困難であり、そのあとの個所を含む碑石断片が未発見であることから、判断は難しい。

ただ、今回の報告者たちは気付いてはいないようであるが、キュル・テギン碑文の漢文面には、確かに突厥第二可汗国の初代をイルテリッシュ可汗ではなく、「骨咄祿可汗」と表記した実例が存する。それ故、報告者たちが、このノムゴン碑文の「Qutluy qayan」をイルテリッシュ可汗その人に比定する事は可能である。ただこの読みと解釈が正しいとしても、本碑文の主人公がイルテリッシュ可汗その人であるのか、本遺跡がイルテリッシュ可汗その人のために建設されたのか、という問題になると問題はそれほど単純ではなさそうである。これ以降に続くテキスト内容にもよるが、碑文本来の主人公であるところの、例えば、彼の直系子孫の出自を述べた個所である可能性も残されている。

今後の発掘調査成果を踏まえて、将来、出土が期待される碑文断片のテキスト内容との繋がりや、碑文全体の文脈を踏まえたうえで、本碑文の主人公と遺跡の被葬者については最終的な判断をすべきであろう。

また本遺跡の建設年代に関しても、本文中に報告者たちが記した出土した動物骨片の放射性炭素による年代分析や屋根丸瓦片にみられる獣文と同時代の遺跡出土のそれらとの比較年代分析からの結果とも併せた上で、考察すべきであろう。

また、例え、報告者たちの見解が結果的に立証された場合でも、何故、イルテリッシュ可汗の墓廟が、彼の息子であるビルゲ可汗やキュル・テギンの墓廟の位置するホショー・ツアイダム溪谷ではなく、そこから東方に約60km離れたノムゴン溪谷に、しかもこれ以外の8つもの遺跡群と共に設置されているのか、という問いに加えて、本遺跡と碑文の規模が息子たちの遺跡・碑文に比して、小ぶりであることや、遺跡の東方に列挙されるバルバル列石の少なさなど、に対しても説明が求められるが、本報告書ではそれらの説明はなされていない。また本遺跡・碑文が徹底的に破壊された時期とその理由についても、突厥内での派閥争いや、740年代のウイグルによる南侵とウイグル可汗国の成立期に伴う混乱などによるものなのかどうかについても検証されなければ

(15『新唐書』中華書局,1972年:6054.

なければならない。

この点も含めて、上記の疑問へは、今後の発掘調査の結果を待って判断されなければならない。因みに、モンゴル語版の報告では、今回の調査結果によれば、イルテリッシュ可汗の墓廟とみなされてきたボルガン県バヤン-アグト郡のシベート・オラーン遺跡は、別の人物の墓廟と見なさざるを得ず、再検討を要する、と述べられている<sup>(16)</sup>。今後、ノムゴン第2遺跡の調査のみならず、それを含む9つある遺跡の発掘調査と出土遺物のデータ分析を通して、個々の遺跡間の関連性についても説明が待たれる所以である。

(16 同註2文献、84頁。

#### 謝辞：

本研究は、JSPS 科学研究費 18KK0017「東部モンゴル新発見の突厥・ウイグル期の定住遺跡に関する歴史・考古学的調査研究」(国際共同研究強化(B), 研究代表者:大澤孝)の助成を受けたものです。

本稿を訳出にあたって、有形・無形にわたってアドバイスをいただいたモンゴル科学アカデミー考古学研究所のG. ルンデフ博士(G. Lkhundev)、ならびにA. エンフトル博士(A. Enkhtur)には厚く感謝いたします。また、図3の写真を提供していただいたカザフスタンの国際テュルク・アカデミーのN. ボーゲンバエフ博士にも厚く感謝いたします。なお、訳文に誤りがあるとすれば、すべて訳者の責任であることを明記いたします。